

高機能広汎性発達障害児の行為障害の研究 —どのような要因が行為障害を導くのか—

大学院医学系研究科

健康社会医学専攻 健康増進医学講座 精神健康医学分野

博士課程 4年 川上ちひろ

指導教授 小川 豊昭

【目的】

近年、高機能広汎性発達障害 (High Functional Pervasive Developmental Disorder: HF-PDD) 児者の行為障害 (Conduct Disorder: CD) について多くの事例報告がなされている。一方で児童・青年の攻撃性や非行 (虞犯) さらには犯罪行為などの CD のリスクファクターは、虐待を含む望ましくない幼少期の家庭環境の経験、すなわち逆境的经验 (Childhood Adversities: CAs) との関連が指摘されている。

HF-PDD においても一般の児童・青年と同様に虐待などの CAs が CD のリスク要因であることが推察されるが、従来の研究では事例検討がほとんどであり、リスクファクターを網羅的に取り上げて実証的に検討したものはない。本研究では HF-PDD における CD のリスクファクターを実証的に検討した。

【方法】

あいち総合医療保健センターの小児精神科を受診した HF-PDD 児者 (IQ70 以上) で、CD と診断された CD 群36名 (男性:30、女性:6、7-30y-old)、CD と診断されていない統制群139名 (男性:117、女性:22、6-28y-old) を対象とした。両群は、性別、年齢、下位診断、知能指数 (IQ) をマッチングした。

① Feature of conduct problems : CD 群については、先行研究や、刑法を参考に分類した CD の種類や頻度について検討した。

② Childhood Adversities (CAs) : Green et al. (2010) の National Comorbidity Survey で使用された CAs12 項目と追加3項目の合計15項目について群間比較を行った。その項目は、虐待経験、家庭内暴力、両親の精神障害、犯罪歴、離婚歴、経済状況などの12項目と、独自に追加した診断時年齢、いじめ経験、本人の多動傾向の3項目である。

【結果】

① CD の種類で最も多かったのは「盗み」で、次いで「性非行」「家出」だった。頻度は「(数回繰り返したが)今のところ再犯なし」と「再犯を繰り返している」が同程度に多かった。

② CD 群と統制群について、CAs の経験率の比較を行った。経験率の差異を χ^2 検定および unadjusted odds ratio によって検討した上で、各変数の影響を統制した Multivariate モデルでロジスティック回帰分析を行った。まず、強制投入法によって全 CAs の相互の影響力を検討し、最後に変数減少法によって最も説明力の高い CAs の組み合わせを同定した。最終的には、neglect 経験が6.34倍、physical abuse 経験が3.73倍のリスクとなること、診断が1歳遅れるごとに1.20倍のリスクとなることが示唆された。

【考察】

HF-PDD の CD の一つの特徴として「盗み」が多く「繰り返し行う」ことが多くみられた。これは PDD の障害特性が CD へとつながる要因となりうることが予測される。

診断時年齢の遅れが CD のリスク要因の一つとして挙げたが、これは PDD の早期のスクリーニングや診断の重要性、また発達障害の障害特性に見合った予防的介入が必要性を示すものであろう。

一般的なケースと同様に HF-PDD の場合も、虐待経験 (ネグレクトと身体的虐待) が CD のリスクファクターとして明らかになった。

以上から、HF-PDD 児者への CD 予防を目的とした介入として、早期発見 (スクリーニング) のシステム、適切な療育や子育て方法の指導などの介入・支援体制の構築が急務な課題であると考えられる。